

①企業大学訪問

私には小学校の先生になるという夢があります。

小学校6年生のとき、私たちのクラスを担当してくださった先生に憧れ、いままでその大きな背中を追いかけてきました。そしてこの仙台第二高等学校に入学し、さまざまな行事を体験させていただいたことで、その夢への道筋はより鮮明に、明確に見えてくるようになりました。

そこで東大見学会の話を目にし、この機会に宮城県とは一味違った、「本場の教育」を目に焼き付けたいと考え、全国の小学校教師が集まり教育の研究を行っている筑波大学附属小学校へ、ぜひ訪ねてみたいと切実に思うようになりました。

波大学附属小学校は、140年前の明治6年に創設された歴史と伝統ある師範学校の練習小学校です。教師やそれを目指す人たちである教育実習生が大勢集まり、「教育とは何か」をテーマに日々研究しています。

研究している場所は校舎2階の講堂です。社会科の先生である梅澤先生に連れられ入らせていただいたとき、講堂内はとても広く、夏の猛暑の中小学校の国語の授業についての研究発表会が行われていました。小学2年生の教材である小説「ミリーのすてきなぼうし きたむらさとし作」の内容について議論されており、挿絵を入れるとどのような認識が子どもたちに与えられるのだろうか、第3段落の「そのときです」という一節にどのような答えを子どもたちに期待し、どのような指導をしてあげたら良いのかなど、一つの作品にこれほどにまで吟味するのかと実感、驚愕しました。

校舎内の壁には子供達が作り上げた理科や家庭科のレポートや、図工作品などが所狭しと展示されていました。そのどれもこれも小学生が作り上げたとは思えないほど質が高いものでした。特にレポートに描かれていた犬とさくらんぼの絵と、文字の綺麗さに「私たちが小学生だったときよりも、とても上手だ」と、私たちは大きな感嘆をもらっていました。さらに、奥にぎっしりと本が詰め込まれた本棚がある教室や、歴史の教科書に出てくるような写真が大きく展示されていた教室もあり、生徒の好奇心をととても大切にしているように感じられました。

筑波大学附属小学校では多くの行事があります。中でも2kmの遠泳は大きなもので、在校生のうち6年生は全員参加します。1年生から5年生までの水泳の授業はこの行事のための水泳練習で、泳ぐことが苦手な子も必ず2kmは泳げるように指導をしていくそうです。私たちが訪問させていただいた時は、炎天下のもと生徒たちがプールで楽しそうに一生懸命泳いでいました。

この筑波大学附属小学校の訪問では、どれほど小学校の授業はこんなにも詳細に研究され、どれほど現代の教育指針に携わっているのかを知ることができ、とても充実とした時間を経験することができました。仲間同士で刺激しあい、その貴重な経験を共有できました。仲間の大きく崇高な志と夢に自らを省みることが多々あったものの、今後の学校生活に向けた大きな目標になりました。

まだ高校1年生という右も左も分からないような未熟な自分ですが、自らが決めた夢に向かって一歩ずつまっすぐ進んでいきたいです。

②OB懇談会

大学受験において東京大学生であるOBのみなさまにお話を伺うことができました。そこで大きく2つのことを学ぶことができました。一つはこの3年間の高校生活をどのように過ごしていくべきなのかについて。もう一つはその3年間でなにを第一に思う心構えです。

高校生活について節目とも言える時期は2年生の夏であるそうです。そんなに早い時期からと苦言を漏らしそうになりましたが、その理由を聞いて納得しました。その夏で、自らが興味を持つものを考えて行きたい大学を決めます。そして、それぞれの大学ごとに入学試験の重視する内容と点数は大きく異なるため、自らが決めた大

学独自の対策をしていかななくてはなりません。しかし、学校の授業での学習量では足りないだろうかと思いましたが、仙台第二高等学校の授業は東北大学の入学試験に特化したものであるため、東北大学以外の大学となると学校の授業とは別の学習をしなくてはならないとのことです。全教科を満遍なく学習するのではなく、目指している大学を合格するために必要な学力から学習法を逆算していく必要があります。また、忘れてはならないのは主体性を持ち、合理的に行動すべきであることです。これはすべての高校生たちに共通することで、どんな大学に入ろうとこの二つが高校生活の中で培われていなければ、社会人としてこの世界を生きていくのは困難を極めるそうです。

そして、私たちは両親の存在を忘れてはならないとも教えていただきました。これまでの自分を支えてくれたのも、こうして何も心配なく勉学に打ち込められるのも両親のおかげであり、自分の力で手に入れられたものではありません。おそらく、これからの高校生活や大学受験でも両親に大きな負担をかけてしまうでしょう。これらのことを強く肝に銘じて毎日を送ってほしい、と胸を打つような言葉をいただきました。当たり前のことはいつのまにか見えなくなっている、いわゆる「灯台下暗し」というものですが、私はもっと自分を支えてくれる大切な人たちに目をむけて生きていきたいです。

「大学受験」というのは私にとって漠然とした存在であり、まだ関係のないような話であると思っていました。しかし、今回の貴重な経験でそんなことも言ってはいられないなと思い知らされたような気がします。私は人生という80年間もの長い道のりと向き合って、3年間の高校生活をどのように過ごすべきなのかを真摯に考えていきたいです。

最後に、校舎を案内してくださった梅澤真一先生、OB懇談会に参加してくださったOBのみなさま。そして、この人生で二度と経験できない劇的な2日間を体験させていただいた東大見学会関係者のみなさまと父さん、母さん。本当にありがとうございました。